

# 村野藤吾記念会

Togo Murano Committee

## 第22回村野藤吾賞

設計 入江正之（建築家・早稲田大学教授）

作品 実験装置／masia 2008

入江氏が、スペイン・カタロニアの伝統的石造民家マジア（masia）と、ファチエスの廃村で出会ったのは約8年前のことと聞く。

マジアは、古代ローマ植民地時代以来の農民住居形式の象徴であったが、数世紀の時のながれの中で廃墟状態になるものが多く、国の経済事情等によってそれに対する調査・研究に十分な手がほどこされなかったようである。

氏がガウディ研究を約40年にわたり続けてきた関係で、カタロニア州政府公認の日西学術文化交流協会より、マジア修復に関わる依頼を受けることになった。

「実験装置／masia 2008」は、18世紀末に建設された遺構の修復・再生作品である。そこでは、残存している主要部分である組積造の壁体をそのままにし、新たに加えられた鉄の架構を壁の内外に配している。マジアが、自然の生態系に順応しながら農業生産を主体とした農民の家であったことを考慮して、自然が多く残る周辺環境をそのままにし、組積造の壁の祖形を際立たせつつ、それを未来へと引き立ててくれる鉄の架構体を拮抗させることに努めている。

その結果、それまで廃墟として残存していた組積造の壁体を主要部分としつつ、その内部と外部に丁寧に工夫された鉄の架構を配した全体に、建築の原初性と現代性とを同時に出現させてみせるのである。

この施設は、日本とスペインの建築分野の学生や若い建築家たちのデザインワークショップの場とされる。この意図のもとにこの場に参画するすべてのものは、初源的にさまざまな使い方が残された場へ企投されるのであり、現在から過去へ、そして過去より未来へ向けてこの場において何をするのか、何をなそうとするのか、何を作り上げようとするのかの問いかけの前に立つことになる。すなわち、この場はこの問いかけに鋭く現在に対峙しつつ、歴史に根差しながら空間を作り上げていく意欲を持つ者への開かれた舞台であり、住まうことの直観を喚起する舞台なのである。

夜ともなればランプの明かりを傍らに、雫りおちる星々のもとで、訪れた者たちが内発的に空間について、建築的なるものへの応答を繰り返しながら、具体的に周辺へと働きかけることができる舞台であろう。

建築の初源を、住まうことの直観を喚起する舞台として問い直した作品である。

これを見た地元の住民も強い感銘を得て、ともすれば安易な目先の目標のもとに矮小化した開発に走ろうとすることを反省し、自ずから己の手によってマジアを今世に生き返す意欲を湧き上がらせている。そして、大地と永い歴史の中から隆起した壁とその足下に居る石、そして赤く錆びた鉄、黒く磨かれた鋼鉄の協演に、市民が魂をゆらかしている。

村野藤吾記念会 代表 池原義郎